

## 更級日記の風の表現

——「おきながといふ人」をめぐって——

元吉 進

一  
更級日記は、作者菅原孝標女の四十余年間の人生を扱った日記とはいえ、分量的には小品と言ふべき作品である。加えて、宮仕え体験をもちながら交友関係は決して広くなかった作者であったから、登場する人物は多いとは言えない。そのなかで、上洛の記に名前が挙げられた息長氏について検討し、この名が敢えて記されたことの意味を、風のもつ表現機能の面から考えてみたい。

二  
上洛の記に、次のような記述がある。

雪ふりあれまどふに、もの興もなく、不破の関、あつみの山など越えて、  
近江の国おきながといふ人の家に宿りて、  
(注一)  
四五日あり。

「おきながといふ人」に関しては、記紀に記された息長氏が当てられて

いる。古事記中巻の開化天皇条には、御子の日子坐王の妻の一人として近つ淡海の御上の祝が以ち斎く天之御影神の娘、息長水依比売の名が挙げられている。さらに、その四世の孫の息長宿祢王が葛城の高額比売を娶って生まれたのが息長帯比売命(神功皇后)であると書かれている。景行天皇条には、倭建命の子孫に息長真若中比売の名がみられ、応神天皇条には、帝が息長真若中比売を娶り若沼毛二俣王を儲けたことが記されている。また、日本書紀の天武天皇条によれば、天武十三年(六八五)冬十月に息長公が真人の姓を賜ったことが述べられている。延喜式の諸陵寮には「息長墓舒明天皇之祖母名曰広姫。在近江国坂田郡。」とあって、息長氏は近江国坂田郡(現在の米原市)を根拠地としていたことが知られる。さらに権記の長徳元年(九九五)十月二十四日条にも「近江国筑摩御厨長息長光保秩満替文」とあり、筑摩の御厨の長に息長氏が当たっていたことが記録されていて、朝廷においても勢力を確保していた古くからの豪族であったことが分かる。更級日記では、息長氏に関しては、その家に四五日逗留したことを記すのみで、他の事情には一切触れられておらず、そこでの見聞も何ら語られるところがない。当の「おきながといふ人」に周防掾息長正則を当てる説もあるが、不明である。この日記において名前が記されている人物は決して

多くはない。息長氏以外で、登場人物のうち姓あるいは名が記されているものを挙げてみると、次のようになる。

A 宮のうみたまへる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得て

B 在五中將の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。

C 良頼の兵衛督

Aは上洛の記で、武蔵国竹芝伝承について述べた部分で、土地の人の語りのなかにみえる。伝承のなかで語られた氏族名であるが、歴史資料にも武蔵氏はみえ、実在の氏族である。勿論、竹芝伝承中の人物の特定はできない。Bは「すみだ川」を渡る際の記述で、在五中將が在原業平を指すこと言うまでもない。Cは永承元年（一〇四六）十月二十五日、大嘗会の御禊の騒ぎのなかを初瀬詣でに出立するところで、この人の家の前を通過して行くことが描かれる。A Bは実在の歴史上の人物、もしくは伝説上の人物であり、作者が実際に会ったわけではない。Cは作者と同時代の人物で、藤原隆家の長男であるが、ここは、日記中で名前と官職名を明記した唯一の例となっている。作者に「いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ」との言葉をかけてくれたのは良頼本人ではなく、その家人か従者であろう。良頼と実名を記載した理由としては、作者の夫以外の家族がこの初瀬詣でを反対するなかで、「己が行動を正当に、理解してくれる輩が良頼の従者の中に存在した<sup>(注二)</sup>」ことを記して、自らの行動の正当化の証明にしようとしたと考えられる。これ以外にも、官職名や女房名で描かれた人物は、三条の宮、侍従の大納言の御むすめ、殿の中將、皇太后宮の一品の宮、越前の守のよめ、等がいるが、ここでは省略する。これに対して息長氏は、実在の氏族であり、作者が実体験として接した人

物であった。だが、決して有力な大家とも思えない息長の姓を明記するのは異例である。しかもその家に作者一行は四、五日も滞在したというのに、そこでの見聞は何一つ記そうとしない。

息長氏が拠点とした坂田郡の地には息長川が流れている。現在の滋賀県米原市を流れる天野川の古称であるが、伊吹山の南に発し、JR東海道線に沿って流れ下り、醒ヶ井を経て米原市街地の北で琵琶湖に注いでいる。日本書紀に「息長の横川」とあるのもこの川とされる。一方、万葉集卷二十には馬史国人の「にはほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言なきめやも」が載っている。「にはほ」、「にはほ鳥」は水鳥のカイツブリの古名であり、潜水が巧みで長時間水中に潜ること、つまり息が長いことから、「いき」の母音交替形「おき」の複合語である息長川に懸かる枕詞として用いられている。琵琶湖は鳩の海とも呼ばれたが、この語が和歌に詠まれるようになったのは平安時代末期になってからのこととされる。万葉集の「にはほどりの息長川」のように、「にはほどり」が琵琶湖に注ぐ息長川の枕詞として詠まれたことで、「にはほのうみ」が琵琶湖の意になったと考えられている<sup>(注三)</sup>。カイツブリの類はまた「しながどり」とも呼ばれ、その「し」は息や風の古語であった。「あらし」（嵐）、「にし」（西風）、「つむじ」（旋風）などの「し」も同じく風を意味する。また、「しなとのかぜ」（科戸風）は「息（し）な門（と）」で、それは風の吹き起こる所の意味であり、風を修辭的にいう語であった（『岩波古語辞典』）。古事記によれば伊邪那岐、伊邪那美命による神々の生成で生まれたのが風の神、志那都比古神（しなつひこのかみ）。日本書紀では級長津彦命、級長戸辺命）であったが、「志那は息長（しなが）の意」で、「人間の氣息と風とを連想したもの」とされる（岩波・日本古典文学大系本頭注）。いずれにしろ、更級日記の息長氏の名には、風を連想さ

せるものがあつたことは確認できるだろう。

日記には息長氏に関する具体的な記述が全くなされていないので、そこで作者が見聞したことは知るよしもない。説話集にはこの氏族に関わる話が指摘される。日本往生極楽記には次の記事がある。

近江国坂田郡の女人、姓は息長氏なり。毎年に筑摩の江の蓮花を採りて、弥陀仏に供養したてまつり、偏に極楽を期せり。かくのごとくすること数年、命終るの時紫雲身に纏りぬ。(注四)

この話は今昔物語集卷十五、「近江国坂田郡女往生話第五十三」に更に詳細に描かれている。

今昔、近江ノ国、坂田ノ郡、□ノ郷ニ、一人ノ女有ケリ。姓ハ息長ノ氏。心柔軟ニシテ因果ヲ悟リ、仏法ヲ信ジテ殊ニ道心有ケリ。日夜ニ極楽ヲ願テ念仏ヲ唱ヘケリ。而ルニ、其ノ国ノ内ニ、筑摩ト云フ所有リ。其ノ所ニ江有リ。其ノ江ニ蓮花生タリケリ。此ノ女其ノ江ニ行テ、蓮花ヲ取テ、心ヲ至シテ、弥陀仏ニ供養ジテ、「極楽ニ迎ヘ給ヘ」ト勸ニ願ケリ。此ノ如クシテ、既ニ数ノ年ヲ経ルニ、遂ニ命終ラムト為ル時ニ臨デ、紫雲西ヨリ簪キ来テ、家ノ内ニ涌キ入テ、女ヲ纏テ有ケレバ、現ニ此レヲ見ル人多カリケリ。而ル間、女紫雲ニ交リ乍ラ失ニケリ。此レヲ見聞ク人、皆、「此ノ女必ズ極楽ニ往生ゼル人也」ト知テ、悲ビ貴ビケリ。実ニ、命終ル時紫雲来テ家ノ内ニ入テ、身ヲ纏テ失ヌレバ、更ニ可疑キニ非ズ。此レヲ聞カム人心ヲ至シテ極楽ヲ可願シ、トナム語り伝ヘタルトヤ。(注五)

近江国坂田郡の息長氏の女が、毎年琵琶湖岸の筑摩の江に咲く蓮花を採って阿弥陀仏を供養し極楽往生を願った結果、臨終に際して紫雲が出現し、

それに乗って西方浄土に往生した、という話である。先述の権記にあったように、息長氏は近江国筑摩の御厨の長に当たっていた豪族であった。御厨は天皇家や伊勢、賀茂等の神社に供御や神饌の魚介類を納める贄人およびその居住地の呼称であったが、筑摩御厨は同じ近江国滋賀郡栗津と栗田郡橋本に置かれた天皇家の栗津橋本御厨とともに重要な地であった。御厨は平安時代末期には多く荘園として変質して行く。扶桑略記の延久二年（一〇七〇）二月十四日条に「永停近江国筑摩御厨」とあって、筑摩御厨は平安時代末期には停止されている。更級日記の作者が立ち寄った頃にはまだ筑摩御厨の機能は存続していたと思われるが、作者はそれには触れていない。日記では、後に成長した作者が伊勢の神や宮中の内侍所について無知であったことを記すが、十三歳の少女には御厨などの情報には興味がなく、話題にもならなかったということかもしれない。ただ、この日記を執筆しているのは五十歳を過ぎた頃であったのだし、後年、伊勢の天照大神や内侍所について人に聞いて知識を得たように、息長氏についても何らかの情報を得たことで興味をもつようになり、その結果の記述が遡って日記に息長氏の名をわざわざ明記するという事に現れたと考えられる。上洛の記には入京前に「粟津にとどまりて」と記すが、息長氏が長を勤めた筑摩御厨同様、朝廷の重要な御厨があった栗津に作者一行が何日かを過ごしたことも単なる偶然ではなからう。

一方、日記内部の構想と関わらせれば、息長氏という氏族の女が阿弥陀仏の浄土に往生した、という説話は、日記の晩年、天喜三年（一〇五五）十月十三日に作者が見た阿弥陀仏来迎の夢の記事と響きあっていると考えられている。津本信博氏は日記のこの箇所のみ家の名を記しとどめてい

ることについて、「在家の女人が往生でき、聖衆の来迎を得ることができ

たという、孝標女が晩年懸念していた阿弥陀来迎にまつわる、息長氏の某女の話が、念頭(注六)にあって、それがその実名を記しとどめる結果となった」と述べておられる。時間的経過からすれば康平元年(一〇五八)十月五日の夫俊通死去に先立つ三年前のこの夢を、日記では順序を逆にして記し、「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」とするほど、老残の孤独にある作者にとって阿弥陀来迎の夢は心の支えとして大きな意味をもったのであろうし、息長氏の某女はあこがれたりうるわけである。遙か少女時代の思い出の一ページに息長氏の名が記される所以である。次に、それ以外の意味について探ってみたい。

息長という名は、ことばとしては風と関わるものであった。更級日記の記述には、風のことかしばしば描かれる。「風」、「嵐」、「川風」、「山風」等、風やその複合語の用例は三十一例を数えることができる。内訳は単に「風」とするもの十四例、「あらし」四例、「秋風」二例、「松風」二例、「川風」・「雲かへる風」・「関のせき風」・「山風」・「雨風」・「南風」・「北風」・「西」・「東」各一例となる。これらについて、その描かれ方や状況に注目して分類してみると次のようになる。

a 梅の香を運ぶ風、萩に吹く秋風など、美的な風情のある風……七例  
b 伝承(竹芝)の語りのなかの「南風」、「北風」など……四例  
c 激しく吹き払う、恐ろしく冷たい風……二十例  
となる。これらのうち、項目cについて何点か確認してみたい。

① その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。かたつ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音いみじう心ぼそし。

② 天ちうといふ川のつらに、仮屋造り設けたりければ、……冬深くなりたれば、川風けはしく吹き上げつつ、堪へがたくおぼえけり。

③ 十月つごもりがたに、あからさまに来てみれば、こぐらう茂れりし木の葉ども残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに見えわたりて、こちよげにささらぎ流れし水も、木の葉にうづもれて、あとばかり見ゆ。

水さへぞすみたえにける木の葉ちるあらしの山のころぼそきに

④ 冬になりて、日ぐらし雨ふりくらいたる夜、雲かへる風はげしううち吹きて、空はれて月いみじうあかうなりて、軒近き萩のいみじく風に吹かれて、碎けまどふがいとあはれにて、

秋をいかに思ひいづらむ冬深み嵐にまどふをぎの枯葉は

⑤ 親族なる人、尼になりて修学院に入りぬるに、冬ごろ、

涙さへふりはへつつぞ思ひやるあらし吹くらむ冬の山ざと

⑥ 東は野のはるばるとあるに、東の山ぎはは、比叡の山よりして、稲荷などいふ山まであらはに見えわたり、南は雙の岡の松風、いと耳近う心ぼそく聞かえて、内には、いただきのもとまで、田といふものの、ひた引き鳴らす音など、田舎のこちして、……

思ひ出でて人こそとはね山里のまがきの萩にあきかせは吹く

⑦ 霜月の二十余日、石山に参る。雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

逢坂の関のせき風ふくこゑはむかし聞きしにかはらざりけり

⑧ その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてま

ず、山風おそろしうおぼえて、

……暮れかかるほどに詣で着きて、ゆやにおりて御堂にのぼるに、人声もせ

ず、山風おそろしうおぼえて、

つりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとなく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。……いみじう風の吹く日、宇治の渡りをするに、網代いと近うこぎよりたり。

⑨ 冬になりてのぼるに、大津といふ浦に舟にのりたるに、その夜、雨風、岩も動くばかり降りふぶきて、かみさへなりてとどろくに、浪のたちくる音なひ、風の吹きまどひたるさま、おそろしげなること、命かぎりつと思ひまどはる。岡の上に舟を引き上げて夜を明かす。雨はやみたれど、風なほ吹きて舟出ださず。ゆくへもなき岡の上に五六日と過ぐす。からうじて風いささかやみたるほど、……

荒るる海に風よりさきに舟出して石津の浪と消えなましかば

①は上洛の記のうち、下総国「くろとの浜」でのことである。秋の月が明るく照る美しい海岸での一夜の思い出で、人々は興に乗って歌を詠むが、作者は美しい光景にもかかわらず秋風の音に心細さを感じている。②も上洛の旅で、遠江国にかかって病を発した作者は天竜川畔の仮屋で数日休養するのだが、折しも冬の寒風が吹きすさんで耐え難かったと記す。③は東山を再訪した時のことで、夏に訪れた際は薄暗く茂りあっていた木々が風に葉を散らされる様を「こころぼそさ」と表現している。④は荻の枯葉を碎き飛ばす程に激しい風が吹き荒れる冬の庭を描いている。「雲かへる風」は雲を吹き払う程に強い風のことであった。⑤は尼になって修学院に入った親族を思い遣っているが、風の吹きすさぶ冬の山里の情景が思い描かれている。⑥は父親が常陸から帰京した後、一家で西山に移った時のことで、秋の風情豊かな山里の風景を描写するなかで、双が丘の松風を耳にしては心細さを感じている。⑦は石山詣での途次の描写だが、冬霜月ということ

で雪が降るなかを逢坂越えする場面である。「そのほども、いとあらう吹いたり」と記しているので、二十五年前の師走の二日、上総国からの上京の旅でここを通過した際にも、この日と同じく雪を巻き上げ風が激しく吹いていたことになるが、上洛の記にはそのことは描かれなかった。さらに、参籠した石山寺でも山風が恐ろしいほど吹いたと記している。⑧は大嘗会の御禊をよそに初瀬参籠に向かう途中の山辺の寺での体験だが、夢のなかで参上した女性の所には風が激しく吹いていると記す。⑨は和泉国からの上京の旅が描かれる。大津の浦での冬の嵐を記すのだが、岩も吹き飛ばしそうな強烈な風が吹き荒れる恐怖の夜で、命の危機すら感じている。以上の①から⑨について、季節は①、⑥が秋であるが、秋の風情あふれる風というよりも、心細さを感じさせるものとして風が描かれている。もっとも、古今和歌集秋歌下にある文屋康秀の「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」のように、草木を吹き枯らす晩秋の風に荒々しい自然の力を感じ取り、秋風に吹きまどう草葉に哀愁を感じるの一般的なことではあった。①、⑥以外は冬のことである。冬だから冷たい風が吹きすさぶのは当然とも言えるだろうが、これほどまで激しく恐ろしく吹き荒れる風を描くのは異様と思われるし、冬の季節の出来事を多く記すこと自体が問題ではあろう。

風は古代人にとって超越的な力をもった存在であった。源氏物語の朝顔巻で朝顔姫君と対面する源氏は、「その世の罪はみな科戸の風にたくへてき」と語るが、「科戸の風」は祝詞「六月の晦の大赦」に「天の下四方の国には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く……遣る罪はあらじと赦へたまひ清めたまふ」とあるように、すべての罪を吹き払ってしまう風であった。それはまた、「気吹戸に坐す気吹戸主

といふ神」の吹く息であると言われる。源氏は齋院時代の昔の罪は皆、風とともに吹き払われてしまったと言っている。このような罪汚れを吹き払う神話的な風の威力という意味合いは先の更級日記には感じられない。作者は風の威力は感じ取っているにしろ、むしろ、人をどこかに吹き払ってしまうような、激しく暴力的な力をもったものとして風が意識されているように思われる。

### 三

少女時代から源氏物語に耽溺した孝標女は、物語の登場人物に自己を投影し、夢想していたと記す。その結果、作者が我が身に引きつけてあこがれたのは夕顔と浮舟とであった。

光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらまじごとにもおぼえけり。

こうした夢想は結婚生活という現実のなかで侵蝕されてゆく。

光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくしすゑたまふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。

として、少女時代からの夢は潰え、物語と訣別したかのように記すのだが、それでも後年の初瀬詣での途次に立ち寄った宇治の渡りでは、

つくづくと見るに、紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかしき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。

と記し、宇治の地でまず思い至ったのが宇治十帖のヒロイン浮舟であったとして、結局、物語への志向が全く消去されたわけではなく、むしろ少女時代以来の懐かしい思い出として常に作者の心に寄り添っているように思われる。

孝標女が夕顔と浮舟、とりわけ浮舟に憧憬を抱くのはなぜか、という問題に関しては様々論じられている。<sup>(注七)</sup>二人の女君に共通する身分や境遇、すなわち中の品の女君であることに受領の娘としての夢を重ね合わせたこと、特に浮舟に関しては、東国と深い縁をもつという共通性や後半生にみられる仏教への傾斜など、いわば身の丈に合った人物として浮舟が選ばれた、とするのが主な理由に挙げられている。そうしたなかで、原岡文子氏は、出自以外に二人の女君に共通するものとして、「彼らが悲劇的な女主人公であったこと」を重視される。若き日の源氏の恋の対象として登場し、物の怪にとり殺されてはかない生を終えた夕顔と、二人の貴公子との恋の板挟みの果てに入水自殺を選びとった浮舟とは「何にもまして劇的な運命の展開、非日常的な漂う浪漫的な生を負っている」として、「さすらい、漂う生を負ったはかなげな女君たちこそが、作者の夢を大きく掻き立て得る」<sup>(注八)</sup>と述べておられる。

浮舟については、遊女の面影が指摘されている。匂宮、薫大将という二人の貴公子にまみえたこと自体がそうであるが、特に浮舟巻にみえる次の場面は大きな意味をもつ。浮舟が匂宮との甘美な二日間を過ごした後、京に迎え取るといふ薫の言葉に従って浮舟の上京準備に宇治にやってきた母中將の君が、宮との過ちを知らずに、

よからぬ事を引き出でたまへらましかば、すべて、身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし

と話す。この言葉を傍らで臥しながら聞いていた浮舟は「心肝もつぶれ」、「なほ、わが身を失ひてばや」と思うに至る。浮舟を残して帰京する母は、心細くなって「しばしも参り来まほしくこそ」と慕う浮舟に、泣きながら「武生の国府に移ろひたまふとも、忍びては参り来なむを」と語るのだった。「武生の国府に移ろひたまふ」は催馬楽の「道の口」を引いている。

道の口 武生の国府に 我はありと 親に申したべ 心あひの風や さきむ  
だちや

都の親から別れて地方に流離した女が、我が身の存在を吹く風に託して遠い都の親に知らせようという内容である。さらに、浮舟巻末に詠まれた浮舟の辞世とも思える次の歌にも、催馬楽「道の口」との関連性が窺われる。

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまふ。  
鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ

直前に京の母中將の君から浮舟の身を案じる文があって、それへの返り事

となっているのだが、吹く「風につけて」都の母に思いを「伝へよ」というのは、これも「道の口」を下に敷いた表現と言えるだろう。さらに、手習巻で、横川の僧都の小野の草庵に暮らす浮舟が、仲秋の名月の頃に女達が弾く琴を聞く場面には、次の描写がある。中將の横笛を受けて僧都の母尼君が一座の冷笑を買いつつも得意気に和琴を弾くのであった。

「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」など、搔き返しはやりかに弾きたる、言葉ども、わりなく古めきたり。

この「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」については、花鳥余情では「これは笛の音のかくきこゆるなり。それを和琴に尼公の引たるなり」として、中將の横笛を聞いた母尼君がこう口ずさみながら和琴を弾くのだとしている。これに対して山田孝雄はこの部分を「たけふ」と「ちちり」以下とに分け、「たけふは催馬楽律の歌の「道の口」のうちのことば」であるとする。そしてこれは浮舟巻の母中將の君の言葉「武生の国府に移ろひ」に誘導されたもので、「浮舟を再び世に出でしめむと希へる小野尼が、この催馬楽をうたへりとするは一方よりいへばかの浮舟巻の記事と首尾照応すべく、一方よりいへばその老尼の心裡をこれによりて言外に描写せるものとして効果少からず」としている。<sup>(注九)</sup> 都の人に浮舟の無事を知らせてあげたいという思いが母尼君の口をついて出た言葉、ということになるうか。

催馬楽「道の口」と浮舟との関係については、かつて筆者も検討したことがある。<sup>(注七)</sup> 「道の口」に謡われた「武生の国府」は越前国府であるが、催馬楽のなかで地名を詠み込んだ歌の数は、都のある山城国が六曲と最も多く、ついで催馬楽に大嘗祭の風俗歌から編曲された曲がある関係上、伊勢国が四曲と多いが、近江国と越前国も各三曲挙げられる。三曲以上はこの

四か国のみである。近江国の曲に関しては「鷹の子」に粟津の原、御栗栖、「近江路」には近江路、篠、「更衣」には篠原の地名が謡われている。越前国の曲では「朝津」に朝津の橋、「挿櫛」に武生（たけく）、「道の口」に道の口、武生の国府の地名がそれぞれ謡われている。「朝津」は「さきむだちや」という詞で終わっているが、この詞は他に「挿櫛」「鷹の子」「近江路」「道の口」「更衣」にもみられる。折口信夫は「記紀、神楽歌、催馬楽をみると、近江のものがいくらでも出てくる」ことから、これらは「近江の国を土台として成立した歌」であり、近江国に接する越前国などをも含めた「近江芸術」の存在を想定した。<sup>(注十一)</sup> さらに催馬楽のなかで「さきんだちや」という詞をもつ曲を挙げ、これを有することが「近江歌の特徴」<sup>(注十二)</sup>とした。これに従えば前掲の近江国の歌三曲、越前国の歌三曲は一つのまとまったグループを形成しているということである。白田甚五郎もこれらが「もとは一連をなしていた」と考え、なかでも「朝津」「挿櫛」「道の口」の三曲はともに越前の民謡という共通点をもつこと、「朝津」に謡われた朝津（浅水）の橋が「挿櫛」「道の口」に謡われた武生の国府に近いことなどから、「朝津」は「浅水生まれの子が武生で遊女となって年経た嘆きを、やや滑稽に自嘲風に歌ったもの」と想像している。<sup>(注十三)</sup> 柳田國男も「道の口」は「親を西南の京なり津の国なりに、置いて来たといふ者の歌」で、「遊行女兒の作」<sup>(注十四)</sup>かとしている。越前国の催馬楽に、流浪の遊女が遠く離れた親を思って寂しく暮らしている、という状況を想定することができるだろう。

浮舟巻で、母中将の君が口にした催馬楽「道の口」は、浮舟の遊女的在り方の象徴であり、さすらいの人生を連想させるものであった。「道の口」を謡った女は武生の国府までさすらったのだが、浮舟は京の都から東の常

陸へ、また京へ、さらには宇治から洛北の小野へと、風に吹かれるかのようになすらい続ける女性なのである。

催馬楽の「道の口」において、遊女と風の意味をみたが、源氏物語のなかでは風はどのように描かれているのであろうか。「風」の語の用例を巻別にまとめてみると、次のようになる。

桐壺巻―四例、帚木巻―二例、空蟬巻―一例、夕顔巻―四例、若紫巻―四例、末摘花巻―二例、紅葉賀巻―一例、花宴巻―一例、葵巻―四例、賢木巻―五例、須磨巻―七例、明石巻―七例、蓬生巻―一例、関屋巻―一例、松風巻―一例、朝顔巻―一例、少女巻―三例、玉鬘巻―二例、胡蝶巻―三例、常夏巻―四例、篝火巻―一例、野分巻―二十七例、真木柱巻―二例、梅枝巻―三例、若菜上巻―五例、若菜下巻―四例、横笛巻―二例、鈴虫巻―一例、夕霧巻―一例、御法巻―四例、幻巻―三例、紅梅巻―一例、竹河巻―四例、橋姫巻―二例、椎本巻―四例、総角巻―九例、早蕨巻―二例、宿木巻―四例、東屋巻―一例、浮舟巻―五例、手習巻―九例

これらのうち、野分巻は文字通り荒々しい野分によって源氏の六条院が傷つけられるという、野分を話題の中心とした内容であるから、二十七ともっとも用例数が多いのは当然と言える。須磨・明石両巻も各七例と多いが、都を離れた人の国の荒々しい風土や須磨浦の嵐が描かれていることによるのであろう。宇治十帖の総角、浮舟、手習巻においても用例数が多くなっている。特に手習巻においては、小野の僧庵に過ぎず浮舟には常に風が吹きつけている。失踪時の記憶をたどるなかでは「皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、川波も荒う聞こえしを」とあるのを始めとして、小野の僧庵では「松蔭しげく、風の音もいと心細き」

「風の騒がしかりつる紛れ」「風の吹き上げたりつる隙」「夕暮の風の音もあはれなるに、思ひ出づること多くて」「夜の風の音」「ひねもすに吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、「あはれ山伏は、かかる日にぞ音は泣かるなるかし」と言ふ」などがある。これ以外にも「山風」や「山おろし」の語もみえる。小野の山里では通奏低音のように風の音が響き渡っている。あたかも浮舟の心を追い立て、吹きさらうかのような激しい風が吹いているのである。浮舟はまさに風に吹かれてさすらう女であるかの如くである。

一方、夕顔に関しては、次のような描写が関わってくるだろう。夕顔巻の「なにがしの院」における源氏と夕顔の逢瀬の場面に、次のようにある。

まだ知らぬことなる御旅寝に、息長川と契りたまふことよりほかのことなし。

この「息長川」は先述の万葉歌を引き、二人の仲が絶えることはないといふ源氏の誓いを表現している。源氏物語では「息長」はこの一例しかみえないが、夕顔と息長を結び付けるものは何であろうか。円地文子は夕顔巻における夕顔と源氏の歌の遣り取りから、夕顔のなかに「無意識な娼婦性」を感じ取り、夕顔本人のみならず「夕顔の宿の半部から額を透かしている女たちの姿まで、少し後の遊女の宿を写した絵巻の風情にどこか似ているように思われる」と指摘している（『源氏物語私見』）。夕顔巻頭で、夕顔の宿の切懸に這い纏わる夕顔の花を見た源氏が口にする「をちかた人にも申す」は古今和歌集卷十九の旋頭歌「うちわたす遠方人にも申すわれそのそこに白くさけるはなにの花ぞも」による。その返歌に「春されば野辺にまづさく見れどあかぬ花 まひなしにただ名のるべき花の名なれや」とあるが、両歌の「花」について竹岡正夫は、

思うに、この「花」とは、遊女のたぐいであろう。それを折柄そこに咲いている梅に託して詠んだものと解される。(注十五)

とする。そもそも、誰とも知れない男に女の方から挑みかかるような「心あてに」の和歌を詠むという、当時の貴族女性の常識を逸脱した行為や、「なにがしの院」では和漢朗詠集卷下、「遊女」の項にある和歌「白波の寄する渚に世をつくす海人の子なれば宿も定めず」を引いて「海人の子なれば」と戯れて源氏の問いをはぐらかしていることなど、さまざま視点から夕顔も遊女の面影を色濃く宿している女と考えられている。

息長川は風のイメージを内包する地名であった。夕顔に関して息長の語が語られるのには、浮舟同様、風にさすらう遊女という側面と、息長のあたる近江が越前と並んで遊女のさすらう地という性格付けがあったことによるのではないだろうか。

#### 四

更級日記には「遊女あそび」に関する記述が三か所みられる。上京の記の足柄越えと野上の宿、それに四十歳頃和泉に下る旅の途中、高浜でのことである。足柄山では、月もなく暗い夜、闇の中から三人の遊女が立ち現れ、空に澄みのぼる声で歌を歌って人々を慰めた後、恐ろしげな山中に帰って行った、と記している。この印象的で叙情的な光景は作者の心に強烈な刻印となったようで、野上の宿で遊女が現れ、一晚中歌を歌うのにも「足柄なりし思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし」と記している。高浜の宿でも舟を漕ぎ寄せて現れ、歌う遊女を「いとあはれに見ゆ」と記す。

男達を慰めるという本来の遊女の在り方はさておき、作者は遊女達のもつ美しさに魅かれ、夜の闇から現れ闇に帰って行くというその在り方に感動を覚えて、神聖視さえしているようである。灯火に照らし出された姿と、闇に消えて行く姿と、こうした遊女達の在り方は「光と闇との交錯の中に据えられることで、この世ならぬ幻想的な美を獲得した」と指摘される所以である。孝標女が遊女に感じ取ったのは、このような、この世ならぬ世界を連想させ、そこにさすらうかの如き美しさだったのである。

実際、夕顔も浮舟も、更級日記の作者が憧れをもって夢見た女君は「さすらい、漂う生を負ったはかなげな女君たち」<sup>(注十七)</sup>だった。こうした遊女の面影を揺曳する夕顔には息長川という近江国の地名が絡んでいた。息長の名は息、すなわち人の吐き出す風と重なる。また、浮舟にはさすらう遊女の面影とともに、越前、近江という地名が関わっていた。さすらいの遊女は風に吹かれて漂い、風に託して遠くの人に我が身の在処を伝えようとする。さすらいという在り方は、風に吹かれて漂うイメージなのである。近江国息長と越前国武生の国府と、そこには、風に吹かれてさすらう遊女の如き夕顔と浮舟の姿が重ね合わせになっているように感じられる。

孝標女は日記のなかで、吹きすさび、人まで吹き払ってしまうかのような恐ろしく激しい風を描いていた。風は決して風流な存在ではなく、暴力的に人をつらい情況に追いやってしまうものでもあった。上京の日記のなかに、近江国のこととしてさりげない形で、しかし日記中では特異な例として息長の姓を明記した理由の一つは、それが近江国という、風にさすらう遊女に関わる地であることであった。「近江の国おきながといふ人」とは、後に自身の憧れの対象となる夕顔や浮舟という、浪漫的な遊女のイメージを秘めながら風のようにさすらう女君への思いを託したことばとして、

象徴的に記名されたとも考えられるのである。

#### 注

- 一、更級日記の本文は、以下、日本古典文学全集（小学館）による。また、源氏物語、催馬楽も同全集による。
- 二、小谷野純一『更級日記全評釈』（風間書房）
- 三、片桐洋一『歌枕 歌ことば辞典 増訂版』（笠間書院）
- 四、引用は『往生伝 法華験記』（日本思想大系7、岩波書店）による。
- 五、引用は新編日本古典文学全集（小学館）による。
- 六、『更級日記の研究』（早稲田大学出版部）
- 七、津本信博氏前掲書など。
- 八、『更級日記』の物語と人生（女流日記文学講座 第四巻『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』、勉誠社）
- 九、『源氏物語の音楽』（宝文館出版）
- 十、『浮舟の「さすらい」と催馬楽 「道の口」』（学苑 日本文学紀要）平成三年一月号、昭和女子大学 近代文化研究所）
- 十一、『近江芸術』（『折口信夫全集』ノート編第三巻、中央公論社）
- 十二、『神楽、催馬楽 — 近江芸術（二） —』（『折口信夫全集』ノート編第三巻、中央公論社）
- 十三、『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』注（日本古典文学全集、小学館）
- 十四、『風位考』（柳田國男全集20、筑摩書房）
- 十五、『古今和歌集全評釈 下』（右文書院）
- 十六、注八に同じ。
- 十七、注八に同じ。

（もとよし すずむ 文化創造学科）